



東日本大震災から12年。被災地では震災、失業、コロナという三重苦に起因した孤立死が増えています。今回は震災で仕事を失って実家を離れた弟に代わり、90代の母親を一人で介護して見送った男性が、そのすぐ後に生きる気力を失って孤独死した事例をご紹介します。

スマイルライフそらふね 震災で変わった一家の運命 母親介護した息子は孤立死

震災とコロナで 孤立する被災者

ソラフネ（宮城県仙台市）が運営するスマイルライフそらふね（旧スマイルライフみやぎ）は、2011年の3月9日、東日本大震災の2日前に開業した遺品整理・生前

整理、ゴミ屋敷の片付けなどを行う企業だ。

「震災から12年、ずっと被災者の方たちと関わってきました。震災から3年が経過したあたりからセルフネグレクト（自己放任）の案件が増加しましたが、コロナ禍後はその時（震災後）の数を

上回っているように感じます」と語るのは鳥谷部剛明社長。2年前に依頼を受けた案件も、震災とコロナの影響が絡み合っていた。

依頼者は孤立死した60代の男性Aさんの娘だった。Aさんは介護していた母親が亡くなってから2ヵ月後、室内で孤立死しているところを発見された。Aさんの実家は震災前まで、独身の弟が両親と一緒に暮らしていたが、震災直後に父親が亡

くなり、次に弟が職を失って行方不明になってしまった。それから高齢の母親が一人で暮らしていたが、90代に入って車椅子を使う要介護状態になってしまった。そこで長男のAさんが定年直前に職を離れて実家に戻り、母親の介護にあたっていた。

「Aさんには奥さんや成人した息子さん、お孫さんさえいたのです。ですがお母さんとの絆が人一倍強い方で、仕事も家族もすべて置いて、一人でお母さんの介護を抱え込む道を選ばれました」と鳥谷部社長。

室内は糞尿の悪臭 冷蔵庫は10数台

鳥谷部社長とスタッフが現場へ赴くと、Aさん



室内の至るところにオムツの入ったゴミ袋が置かれ、悪臭を放っていた

の実家は大きく立派だったがセルフネグレクトの状態に陥っていた。室内には汚れたオムツの入ったゴミ袋が至るところに放置され、悪臭を放っていた。ゴミ捨て場は近隣の集会所のようになっていたので、近所の人に母親の汚物を見られたのがあったのだろう。



一つの家に複数の同じ家電があるのがセルフネグレストの特徴だ

入っていた。Aさんは最愛の母親を亡くしたのがよほどショックだったようで、一人になると生きる気力を失い、母が亡くなった2ヵ月後に孤立死してしまっ

同じ家電が複数あるというのもセルフネグレクトの特徴だ。その家にも冷蔵庫が10数台もあって、中には腐った食材が

「Aさんにもう少し人との繋がりがあったら、残念でなりません。当社は一人で悩んでいる方が専門家の存在を認知し、役立てて頂けるようにと、YouTubeを通して情報発信しています」。

東日本大震災の被災者と共に歩んできました



鳥谷部剛明社長

2009年、WEBプロモーション事業をスタート。2011年3月9日、遺品整理業「スマイルライフみやぎ」を新たに開業し、宮城県初の遺品整理士となった。2日後に東日本大震災が発生し、仮設住宅をはじめ、数々の遺品整理現場を経験。13年に法人化し、株式会社ソラフネを設立。社名は“天国に思い出を運ぶ舟”というイメージで命名した。同時に「スマイルライフそらふねチャンネル」を開業、現場の動画をアップしている。反響は大きく、全国に住む人から東北の遺品整理を依頼されることが増えたという。